

トボス
場の遷移への序章

この頭上はるか 誰かが、運命の翼をかざしたわけではない
あの路上に見終えた敗北は、ひそやかに望まれていたのではなかったか

いまは…何も 言えない。けれど

いつか…しら 癒える。そのときまで、閉じこもればいいさ

こころの殻は ユメとコトバを分泌する揺籃であり

かぎりなく深い 時のゆらぎが必要なのだ

けれども おれが脱ぎすてた虹色の貝殻は

児童遊園地の砂を噛み

十一月の雨に打たれて いまも

倒れ残っている

この小さな砂場の夕暮れに、置き忘れられたままごとのお箸とおわんから
一日のどんな安息を、すくいとることができる？

一人言を抱いている少女ならば

どんな道はたでも広場でも そこに

そのまましゃがみ込んで ままごとを始めるだろう

しあわせな時間はまだたくさん残っている

けれども未来の時刻まで！ ユメを前借りし
美しくもなかった幻想に身を投じたテロリストは
今さらどんなコトバの小徑をたどり
帰ってゆけばよいと いうのだろうか？

朝つゆに逆さに映る小さな物語であろうとも、それが世界のすべてである
：と、幽冥の水鏡をのぞき込む「危うい朝」は、だれにでも訪れるだろう

喪つてみれば 心のどこかに
在るけれども見えないブラックホールに 気づくのだ
何度も反芻した 初恋の記憶のように
手に残る 擦りきれた「半券」

いつまで頑なに 握りしめていようというのか？
もはや不在証明にしかならない 遺留物ばかり！
戻る気のないストップオーバー 非日常生活の不法残留者となって
夜ごと、暗黒星雲に遊撃する日々

こころの温度で吃音をなめ躡す跳ね上がり分子は、どんな広場でも石塀の中でも、そこに
そこそこ居場所を見いだし、自らの手でかじかんだ失語をひもとく他ない

ダンボールがありや過去の箱おとこになればいい
新聞紙でもありや未来のミイラになるもよし
だがおれは

地に伏す者にはならない！なれない、馴れもしない：

ディレンツァイシマ

直登主義のロック・クライマーは、夜ごと 絞首刑をねむる

腐食した夢や 石化した希望 擦り切れた物たちを寄せ集め

糞掃衣（ふんぞうえ）を纏（まと）う 蓑虫

日々使い捨てする言葉の墓場で 無用な眠りに落ちないために

「単独登攀者の、登高の鼓動と響き合い

違和の亀裂に打ち込む一行は 全体重を支えるに足り、

寝入り時の 全疲労を支えるに足りる」

…と、かつて 手帖に書き留めたのをきみは覚えているだろうか？

だがおれは自分の決意を裏切り

「言葉を登り窯にくべ、灰釉はいゆうを視るのも悪くない」と

おまえに告げて、別れたのち

独り歩いていた野の道に火を放った

焼け跡に炎は戻ってこない！ そう思い、定め

やがて黙して語らない者となり

古い地層一九六九の化石となりはてる

（もうひとりの自分、きみは…）

この頭上はるか

誰かが…

運命の翼をかざした

わけではない